

腔腸動物及び棘皮動物に関する五島先生の業績

内 田 亨

故五島清太郎先生の歐文の原著は、1890年の *Diplozoon* の研究にはじまり、1933年の石井信太郎氏との共著 *Amphipilina japonica* に関するものに終つてゐる。全30篇の中、寄生蟲に関するものがその約半ばを占め14篇に達してゐる。先生の御専攻の最たるものが寄生蟲にあつたことは素より論を俟たないが、其他の論著については棘皮動物の海星類に関するもの6篇、腔腸動物のヒドロゾア類に関するもの6篇、貧毛環蟲類に関するもの2篇、ヒキガヘル及びフナムシの畸形に関するもの1篇、カブトガニの生態に関するもの1篇である。恩師の論著を評價し紹介することは至難の業であつて常人の敢て企て及ばざる所であり、不肖小生のごとき者の最も不適とする所であると信するので、單に茲にその内容の概略を紹介することに止める。

1) 貧毛類に関するものは純分類學のもので、先生が第一高等學校に在任せられてゐた當時、現東北帝大教授畑井新喜司博士との共著になるものであつて、僅に2篇ではあるが當時本邦の陸産貧毛類の知見は殆ど皆無にすぎなかつたのであるが、この2篇出づるに及んで學界に貢獻する所大であり、且つ先生の指導を受けた畑井博士及び野村益太郎博士は共に東北帝大の動物學の教授として自ら貧毛類の研究をされ、或はその門下の貧毛類の研究を指導されて居り、且つ東北帝大以外に於ても貧毛類の研究に没頭する者輩出し實に多士濟々本邦産の貧毛類は非常に進歩をとげ、分類學的研究はこゝ數年の中には或は完成せられるのではないかと云ふ状態にあるが、其他生理、生態に関する業績も次第に發表されて來てゐる。

2) 腔腸動物に関するものは先生は分類學よりは寧ろ形態學的の仕事の主としてされたのであつて、先生の腔腸動物研究は先生の留學中 Johns Hopkins 大學に於て BROOKS 教授の指導を受けてゐた際に始つたと思はれる。同教授所藏のカツヲノエボシ *Physalia maxima* の標本について1895年から1897年の間に組織形態學的報告を3篇發表せられてゐる。更に1897年には本邦産特種のエダウミヒドラ *Dendrocoryne* についてその興味ある點を指摘し、1903年には本邦産の美しいヒドロ水母のハナガサクラゲ *Olindioides formosa* 及びカギノテクラゲ *Gonionemus depressum* を共に新種として記載されてゐる。この論文の中に特にハナガサクラゲの平衡器の構造及び成因について詳細に研究され、從來の人がこれ等の屬及び淡水水母等に於ては平衡器の形成に内胚葉もあづかると云ふのに反し、先生のは外胚葉のみでできると云はれ、これ等の水母を *Leptomedusae* に入れられたのである。これ等水母の分類學的位置は生活史、生殖の方法其他も考慮されて今もつて *Leptomedusae* に入れるか *Trachomedusae* に入れるかは決定してゐないものである。水母の權威 A. G. MAYER (1910) は大著 *Medusae of the world*, vol. 2, p. 340 に Family *Olindiadae*, sensu GOTO を *Trachomedusae* の初めにおいてゐて、その中に次のやうに書いてゐる：

"PERKINS and MURBACH conclude that the marginal concretions of *Gonionemus* are of entodermal origin and that this genus is one of the *Trachomedusae*, while Goto, who is an exceedingly

careful observer, concludes that the concretions of Olindioides are of ectodermal origin and that the medusa belongs to the Eucopidae."

以て先生の研究が米國の専門家の中で如何に信頼されてゐたものであるかを知ることができやう。1910年には興味あるヤドカリと共生する *Hydractinia* 2種について詳細な形態學的報告をされ、この挿圖は歐洲の専門教科書にはよく轉載されてゐる所である。またヒドロ蟲と先生とに關して特に注意しなければならないことは、動物學雜誌に1890—92年に互つて掲載された稻葉昌丸氏の本邦産ヒドロ蟲に關する邦文の記載を英譯してドイツの STECHOW 氏に送られたことであつて、これは1913發行のミュンヘン博物館の本邦産ヒドロ蟲の報告に同氏の感謝と共にその儘出版されてゐるのである。腔腸動物に於て間接に先生の指導を受けた人々には木下熊雄博士(ヤギ類)、川村多實二教授(實水母類)、淺野彦太郎氏(イソギンチャク類)及び駒井卓博士(クシクラゲ類)等があり、直接先生の指導を受けた人々には新庄巍理學士(タコクラゲ)、大久保忠春理學士(十文字水母)、中本大二理學士(*Cerianthus*)、篠原雄理學士(ヒドロゾア類)及び小生等がある。また大正2年8月卒業論文研究中に急死された千葉秀樹氏(ヒドロ水母の出芽)を特記しなければならない。たゞ遺憾に思ふのは、先生と最も關係の深いヒドロ蟲類の研究が STECHOW 氏の報告(1913)以來殆ど進んでゐないことである。併し當教室の岩佐正夫理學士の努力により海産のものは數年ならずして纏り、桑原萬壽太郎理學士によつて淡水産のものの研究が次第に進められつゝある。

3) 棘皮動物に關する原著6篇の中5篇までは海星類の發生に關するものであつて、歐米のイトマキヒトデ屬 *Asterina* の2種について發表された。無脊椎動物の發生の碩學 McBRIDE 教授は先生と意見を異にされる所があり、數回に互つて2權威の間に論議が重ねられたことは人の知る所である。最後に1914年に發表されたものは本邦産海星類に關する第1篇であつて、東大理學部紀要29卷第1篇に發行されてゐる。先生多年の苦心の結果になるもので全頁808、圖版19枚に及ぶ大冊のものであつて、本邦産 *Phanerozonia* の大部及び *Forcipulata* の一部分の從來の記載と合せて先生自身の觀察を記されたものであつて、本邦のみならず、廣く世界海星學者の大いに便利とする所のものである。先生は之に引續いて他の群も同様に記載される御心算であつたと推察される。更に Albatross 船採集の海星の標本について御研究中であつたので、十數種についてのマヌスクリプトが多數の海星の標本と共に當教室に小生の管理の下に保存されてゐる。棘皮動物について先生の間接の指導を受けた人に九大の大島廣博士(海鼠類其他)があり、松本彦七郎博士(蛇尾類)がある。今は大島廣博士の指導を受けて海膽類の分類に専心してゐる池田隼人學士あり、駒井卓博士の指導を受けてゐる奈良女高師の小野田勝造學士の立派な發生學的の研究があり、且つ東北大學ではシロナマコ *Caudina* につき形態・生理・發生等各種の研究が發表されてゆくのに反して、先生の御専門の海星類については小生親しく御指導を受け且つ先生の研究の續行の御依頼を受けてゐるのにも拘らず菲才弱行、當教室林良二理學士の形態學的研究を除いては何等見るべきものもなく、之を記しつゝも自責の念焦躁の感に堪へぬものがある。